「図書館：変革のための対話」
-IFLAアテネ大会を振り返る-

メタデータ	言語:
	出版者: 日本図書館協会
	公開日: 2024-01-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三浦,太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000197

小特集★IFLAアテネ大会レポート

「図書館：変革のための対話」
―IFLAアテネ大会を振り返る―

三浦太郎

アテネ開催

ギリシアには古代世界のイメージがともなう。首都アテネの市街には古代建築が溶け込み，アクロポリスの丘に力強くそびえ立つパルテノン神殿を筆頭に，女神アテナらを祀るエレクティオン神殿，市民たちが集った古代アゴラ，円形の屋外施設として現在も使われているヘロディス・アッティコス音楽堂など，遥かな昔へと誘う雰囲気を醸し出している。

市内パネピスティミウ通りに面した旧国立図書館も，19世紀になってデンマークの建築家テオフィル・ハンセンの設計により建てられたものだが，ドーリア式神殿を模倣し，街の風景と調和している。図書館機能は，現代的な新国立図書館に移されたものの，アテネ国立大学，アカデミーと並び立つ「ネオクラシック三部作」のひとつとして，輝きを放っている。

▲ギリシア旧国立図書館

2019年８月24～30日，アテネ国際会議場（メガロン）で第85回国際図書館連盟（IFLA）年次大会が開催された。ギリシアでは初開催となった。大会テーマは「図書館：変革のための対話（Libraries：Dialogue for Change）」である（なお，同会議場では昨夏にも第36回国際児童図書評議会（IBBY）世界大会が開かれている）。

参加者は，140を超える国と地域から3,636名に上った。約250のオープン・セッション，66の企業展示，ポスター発表198件（事前登録）が行われた。日本からも30名以上が参加し，例年以上に多くの発表が見られた。プレ会議４会場でモデレータを務めたケースが３件，発表７件が行われたほか，本大会でチェアを務めたケースが１件，３セッションで発表４件が行われた。ポスター発表も７件に上った。

発表は以下の方々である（各セッションにおける日本人名のみ挙げてある）。

○プレ会議

・８月20～21日，エジプト・アレクサンドリア（モデレータ３件，発表４件），セッションＳ22：「印刷物を読めない人びとを含む万人への公平な図書館サービス」

セッション１「読む権利：障害者権利条約（CRPD）の原則とマラケシュ条約」，モデレータ：河村宏氏（支援技術開発機構（ATDO）），発表者：大村佳史氏（国際協力機構（JICA））「読む権利の提唱」

セッション２「アクセス可能な図書・出版物／生産物」，発表者：村田真氏（慶應義塾大学）「基準はなぜ問題か？」

セッション３「オルタナティブなアクセス可能図書を世界規模で共有する」，モデレータ：野村

美佐子氏（日本DAISYコンソーシアム）
セッション4「世界の実践事例」，発表者：神尚喜氏（全国視覚障害者情報提供施設協会）「サピエ」，野村美佐子氏「特別なニーズをもつ人びとへの図書館サービス分科会（IFLA/LSN）の活動」
セッション5「今後に向けて」，モデレータ：河村宏氏

・21日，セルビア・ベオグラード，セッションS06：「多民族社会における地方史・系図」ほか，発表者：長塚隆氏（鶴見大学）「デジタル・コラボレーション」
・22日，ドイツ・ベルリン，セッションS08「図書館におけるロボット」，発表者：原田隆史氏（同志社大学）「日本の図書館におけるロボット工学とAI技術」
・23日，ギリシア・アテネ，セッションS12「灰色文献とは」，発表者：上保佳穂氏・相原雅樹氏（国立国会図書館（NDL））「日本のアカデミズムにおける灰色文献」

○本会議

・26日，セッション114「データマイニングと人工知能」，発表者：里見航氏（NDL）ほか「デジタル・ライブラリーの新たな機能性」
・26日，セッション127「静けさの中の対話がもつユニークさ」，チェア：野村美佐子氏
・27日，セッション152「災害の結果を踏まえた，その先の議論」，発表者：佐藤従子氏（NDL）「大震災に備える」
・29日，セッション252「グラハラン［・サーミ］，儀式，ティカンガ［・マオリ］」，発表者：石原真衣氏（北海道大学）「先住民の子孫の視点から図書館利用を考える」，亀丸由起子氏（北海道博物館）「アイヌの人びとにとって博物館・図書館の連携から何が得られるか」
・ポスター（7件）：（64番）薬師院はるみ氏（金城学院大学）「NDLSHとLCSHの件名標目を探索するシステム」
（116番）宮原志津子氏（相模女子大学）「iPadの“PeKay”アプリを使ってコミュニティ情報ガイドを作成する」
（118番）村木美紀氏（同志社女子大学）「『マンガ』のためのレファレンスツール」
（121番）元木章博氏（鶴見大学）「日本の図書館運営における情報アクセシビリティの事例」
（172番）角田裕之氏（鶴見大学）ほか（※日中共同）「Biorxivの論文投稿状況とフロー分析」
（173番）星野ゆう子氏（鶴見大学）「日本と米国アリゾナ州の図書館障害者サービスの比較」
（195番）佐藤翔氏（同志社大学）ほか「図書館デザインを検証するVRシステムの開発」

発表の多くは英語で行われた。大会ウェブサイトで要旨を見ることができる[1)]。

「日本コーカス」

初日（8月24日）は午前中から分科会ごとに45に上るビジネス・ミーティングが開かれ，夕方にはセッション050「日本コーカス」（18:00-18:50，MC3）を含めて，国や地域ごとに関係者の集まるコーカス（地域会議）が13ほど行われた。

日本コーカスの報告者は，IFLAの分科会委員や連絡委員を務める以下の14名であった（五十音順。〈 〉内は分科会の略称等を記す）。改選時期に当たっており，ひとりが複数の分科会に所属する場合もある。

・井上靖代氏（獨協大学）〈FAIFE：図書館の自由，RSCAO：アジア・オセアニア〉
・岩崎れい氏（京都ノートルダム女子大学）〈SL：学校図書館〉
・奥山裕之氏（NDL）〈LRSP：議会図書館〉
・小田光宏氏（日図協理事長，青山学院大学）〈SET：図書館情報学教育，CPDWL：研修〉
・河村宏氏（上掲）〈LSPD：印刷物の利用に障害のある人びとへのサービス，RSCAO〉
・護得久えみ子氏（東京子ども図書館）〈CYA：児童・ヤングアダルト〉

・佐藤従子氏（上掲）〈PAC：資料保存〉
・下田尊久氏（藤女子大学）〈LTR：理論〉
・竹内ひとみ氏〈PL：公共図書館〉
・角田裕之氏（上掲）〈SET〉
・兎内勇津流氏（北海道大学）〈IM：先住民〉
・長塚隆氏（上掲）〈RSCAO，LHG：地方史〉
・野村美佐子氏（上掲）〈LSN 議長〉
・村上健治氏（神戸大学附属図書館）〈LSM：多文化〉

報告を通じて，各セッションの新期執行体制，サービスガイドラインやマニフェストの改訂状況，国連の進める「持続可能な開発目標」（SDGs）への取り組み，アクションプラン，来年のウィンター・ミーティングやプレ会議・ポスト会議の予定，さらには，IFLAにおける中期的な組織改編への対応など，現状報告が行われた。30名を超える日本人関係者が参加した。

このうち河村宏氏からは，エジプト・アレクサンドリア図書館で開かれたサテライト会議の討議の様子が報告された。JICAの支援のもと120名以上が参加し，９か国20名以上の発表があったという。エジプトで教科書・教材をアクセス可能にする技術協力の事例では，技術移転を進めるだけでなく，制度を移して基盤づくりを行うことの重要性が確認されている。

開会式，公開セッション

２日目（25日）午前中には，ランブラキス・ホール（LH）で開会式が行われた。２階席までほぼ埋まり，立ち見が出るほどの盛況であった。大会を共同で主催するアレクサンドラ・パパゾグロ氏（ギリシア図書館員・情報専門家協会会長）とフィリポス・シンポグロ氏（ギリシア国立図書館長）が対話形式で歓迎の意を示したのち，ペレス・サルメロンIFLA会長，ゲラルド・ライトナーIFLA事務局長，ソフィア・ザチャラーキ教育副大臣らのあいさつがこれに続いた。

本大会で任期満了を迎えるサルメロン会長は，「ライブラリアンとしてのプライド」が自らの活動の支えとなってきたことに言及し，「図書館フィールドを統合」する必要性を述べた。またライトナー事務局長も，「ライブ・ストリーム中継を視聴している人たちも含め，ここに参加する一人一人が“IFLAファミリー”であり，IFLA発展の鍵である」ことを強調した。

▲セッション風景①

あいさつの後，ソフィア・スピラトゥ劇団によるパフォーマンスが披露され，古代以来のギリシアの歴史が振り返られた。ルーカス・ツォカロス氏（アテネ大学名誉教授）の基調講演「変革のための対話と共有財の共同管理」も行われた。

開会式終了後，午後からは公開セッションが開始され，夕方にはレセプションも行われた。翌３日目以降，公開セッションがプログラムの中心となったが，以下，その一部を紹介する。

IFLAの動向に関するセッションとして，セッション098「IFLAハイライト」（26日8:30-9:30，LH）では，ライトナー事務局長から，大会期間中に公表された『IFLAストラテジー2019-2024』[2]の概要について説明があった。IFLAは，より包括的（インクルーシブ）な機関となることを目指している。2017年４月にアテネで始まった「グローバル・ビジョン・ディスカッション」では，その後8,500以上のアイデアが寄せられ，今回それに基づき四つの戦略的方向性が示されることとなった。すなわち，

（1）図書館員のグローバル・ボイスを強める
（2）専門的実践を奨励し高める

（3）図書館領域をつなぎエンパワーする

（4）私たちの組織を最適化する

である。「実行を伴わないビジョンに意味はない」と，実現に向けた決意も示された。

クリスティン・パーベルザ氏（IFLA事務局）からは「世界の図書館マップ（Library Map of the World：LMW）」の進捗状況が報告され，166に上る国と地域の190機関の協力により，世界の図書館環境を総覧できる体制が整ってきたことが紹介された。また，IFLAの活動をまとめた『発展と情報アクセス報告2019』[3]についても，作成者のひとりステファン・ウェバー氏（IFLA事務局）から報告があり，エビデンスを重視し，政府機関などステークホルダーにIFLAの取り組みを広報する意義が強調された。

IFLAの戦略的方向性については，同日のセッション112「ビジョンから実行へ」（11:45-12:45，LH）でも改めて取り上げられた。世界の人びとから図書館に対する期待がかつてなく高まりを見せる中で，図書館界の力を結集し，関係者がもっと連携して行動することで，未来が切り開かれるとの見解が示されている。

ただ，その際，連携の中心はやはりヨーロッパだと言えよう。セッション250「なぜ国際連合（UN）の問題があなたの問題となるのか」（28日11:45-12:45，LH）に登壇する中でウェバー氏は，文化・学術・変革の中心として「図書館を強くしてヨーロッパを強くする」（Stronger Libraries for Stronger Europe）と述べたが，そうした意識が端的に示されている。IFLA会員数で見ても，1,333（2018年末現在）の機関・個人会員のうち44.9%（599）をヨーロッパの図書館・図書館協会などが占めている（アジア・オセアニアは289である）。

▲セッション風景②

このほか，各セッションでは館種別，サービス別，周縁テーマなど，多様な話題について報告や議論が行われた。例えば，資料保存を扱ったセッション152（27日8:30-10:30，トリアンティ・ホール）では，日本の佐藤従子氏から，阪神・淡路大震災（1995）や東日本大震災（2011）への対応が報告され，「地震を防ぐことはできないが，建物の補強や新たな耐震措置により，被害を最小限に抑えることができる」旨が述べられた。続いてアルカイダによる文化遺産の破壊行為や，「水の都」パリにおける洪水対策と排水設備の課題，火災の経験をもつストラスブール国立・大学図書館におけるジオサーマルの活用可能性などが報告され，資料保存を考える複合的観点が示されていた。

また，同じ日のセッション193「図書館情報学教育の質保証を評価するための国際的枠組み」（16:00-18:00，MC３）では，テーブル・ディスカッション方式で，図書館情報学教育の質保証が議論された。筆者はテーマ５「認証」のテーブルに着いたが，東南アジアにおけるA-LIEPの取り組みや，アフリカや中南米における修士レベルの教育事例，北米においてライブラリースクールが「図書館」から離れてテクノロジー中心に移行しつつあることなど，各地域での取り組みを聞くことができた。時間内で，国際的に均質な認証の枠組みをつくることを提起するには至らなかったが，こうした対話や議論を通じて，ローカルな課題をグローバルな視点で捉えることは，今後ますます必要性を増すと思われる。

会員総会

研究発表以外にも，４日目（27日）夜には全体の公式イベント「文化の夕べ」が開催された（セッション199，19:00-23:00，ギリシア新国立図書館）。飲

食を手に，同館内を自由に見学できたほか，屋外に設置されたステージ上で，フォークダンスやロックの演奏などが行われた。地中海料理やワインを楽しみながら，さまざまな国の参加者と交流する，貴重な時間を過ごした。

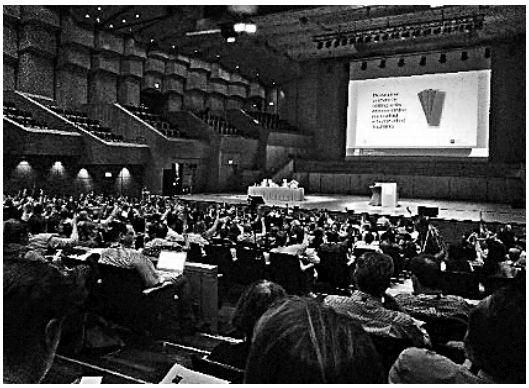
５日目（28日）午後には会員総会が開かれた（セッション241，16:15-18:00，LH）。サルメロン会長のあいさつでは，まずUNの提唱するSDGsへの対応が述べられ，グローバル・ビジョンとLMWによって，図書館界のつながりが向上した点が強調された。ライトナー事務長からは『IFLAストラテジー2019-2024』をはじめとする活動報告がなされた。

監査のバーバラ・リゾン氏（2021-2023年のIFLA会長に内定）からの決算報告では，2018年度の収支が，収入218万ユーロに対し支出189万ユーロと発表された[4]。29万ユーロの黒字であり，一般引当金（general reserves）の総額は151万ユーロに改善されたという。収入面では「ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団」からの寄附金が大きく，会費収入34.3％（75万ユーロ）に次ぎ，32.5％（70万ユーロ）を占めている。事業活動を展開する上で外部資金の欠かせない状態が続いている。このほか，物価変動に応じた会費改定に関する動議も承認された。

議事の約半分は６日目（29日）の閉会式（セッション276，16:00-17:30，LH）に持ち越された。閉会式では，サルメロン会長の退任の辞や，新旧執行部役員の紹介などがあり，クリスティン・マッケンジー新会長からも就任あいさつがあった。「我われにできることをしていく」というシンプルなモットーが示された。

また，IFLAの活動に功労のあった人への各種表彰の中では，2019年度前期に一橋大学研究員として来日したスティーブン・ウィット氏（イリノイ大学）に対して，長年『IFLAジャーナル』編集委員長を務めたことなどが評価され，感謝状が贈呈された。

最終日（30日）には，市内や近郊都市の図書館を訪れる「ライブラリー・ビジット」（要事前申込）も実施され，多くの図書館関係者が一緒になって見学を楽しんだ。



▲会員総会

次回のIFLA大会は2020年８月15～21日にアイルランドの地ダブリンで開催される。昨年時点ではいったん，ニュージーランド・オークランドと公式発表されていたが，会場を予定していた国際会議場の新設が難航し，再選定されたものである。なお，2021年大会はオランダの国際都市ロッテルダム，2022年大会がオークランドで開かれる予定である。

IFLA分科会常任委員の方々をはじめ，現場の図書館員，大学教員や研究者，大学院生など，図書館関係の皆さまのご参加を，心よりお待ちしております。

注

以下の参照先の最終アクセス日は，いずれも2019年10月24日である。

1）IFLA WLIC 2019 Conference Programme［http://www.professionalabstracts.com/iflawlic2019/iplanner/#/grid］

2）IFLA Strategy 2019-2014［https://www.ifla.org/strategy］

3）Development and Access to Information（DA2I）Report 2019［https://da2i.ifla.org/wp-content/uploads/da2i-2019-full-report.pdf］

4）IFLA Annual Report 2018［https://www.ifla.org/files/assets/hq/annual-reports/2018.pdf］

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC10：010.6　BSH：国際図書館連盟］